

目前に陰茎が突きつけられた。

「味わえ。今からお前の尻の穴を貫くこれを舐めて味わえ」

麻美が大きく口を開き、顔を寄せ、鞭で煽られ焼かれた肛門を陵辱させる為に平尾の陰茎を舐め、そして吸い上げはじめる。

その舌使いは、今までの彼女にない程に激しく、そして淫らなものであった。頬を窄めて吸い上げ、固い男の肉を唇に挟み込む。口の中の陰茎が感じる快感にピクリと震えると、彼女は微かな喜びにも似た感情を覚え、よりいっそう、愛撫を強めていく。

平尾が、股間で淫らな動きを繰返していた麻美の顔に手をかけ、引離す。

「床に這え、尻を掲げるんだ」

麻美が、今まで陰茎をしゃぶっていた唇を舐め、こくりと肯いてから、床に両手を付き、彼に向けて尻を大きく掲げてみせる。そして、命じられる事を待つまでもなく、その脚を開き、腰を後ろに突き出して見せる。

尻の狭間の、鞭と炎によって陵辱された2つの箇所がむき出しになり、肉襞がめくれ上がった性器の狭間では、彼によって注ぎ込まれた白濁の残滓がこびりつき、粘膜には刻み込まれた赤い鞭跡の線が走っている。

平尾が、そんな彼女の尻の狭間に手を伸ばす。揃えた2本の指が、膣口をこじ開け、ねじ込まれると、まるでそれを待ち受けていたかのように膣穴と肛門が窄まる。

「あっ……」

麻美が低く声を上げる。だが、その声は傷つけられた性器を弄られる時の苦痛の声とも、そして又、快樂のそれようにも聞えた。

平尾が、自分の注ぎ込んだ精液のぬめりを利用して、彼女の膣穴を騷りはじめる。指の動きとともに肉壁が収縮し、指に絡み付ついてくる。平尾が指の根元まで深くまさぐると、わずかに開いた唇から、はつきりとした快樂の声が漏れ出す。

「ああ……。 イイ……」

平尾の指に新たな愛液がしたり、ぬめった肉襞をその指が左右に広げる。

「イイのか？」

平尾が肉襞を弄りながら問いかける。

「は……、はい……。痛いけど……。とつても、とつてもイイの……」

麻美が性器を蹴られる快感に尻を振りながら答えると、平尾が、持ち上がりはじめている陰核を指の狭間で捉え、捻り上げる。その瞬間、彼女の股間がまるで電流が走ったかのように震える。

「ああ、痛い。でも、でも、そこ、とつても感じる……」

「痛いのが好きなのか？」

「……う、うん……。好き……。すき……」

平尾に弄られる性器を、彼女は激しく濡らす。愛液と精液が混じりあい、そのぬめりが太股に向かつて垂れる。

麻美が、もどかしげに腰を前後に振りはじめ、喜びの声を上げた。

「ああ……。イイ、イイの、とつても……。イイの」

快楽とそれを助長する苦痛に喘ぎながら、憑かれた者のように激しく腰が振るえ、それにしがって平尾の指が強く彼女の膣壁を擦りあげる。

平尾の指と、それに操られるように蠢く麻美の尻。その動きが激しくなり、彼女が前後に揺する尻の狭間で、淫らな肉音が聞こえはじめた頃、平尾が指を抜きさった。

「ああ、イヤッ……」

絶頂を迎えようとしていた麻美が中断された快感に喘ぐ。

「淫らな尻めっ！」

平尾が、麻美の尻に数度平手を打ち付けてから、その腰を両手でつかみ、陰茎を待ち望み内部の肉の造りまでをもさらけ出している膣穴に向けて、一気に挿入する。

「ひっっ！」

激しい勢いに麻美が悲鳴を上げ、そしてその瞬間、軽い絶頂が彼女の身体を貫く。

平尾は数度強く腰を振り、膣穴を犯した後、愛液と精液によって濡れた亀頭を彼女の肛門に触れさす。

麻美が、すすり泣くような声を上げる。

「ああ……。お尻なのね……。わたしは、傷つけられて、焼かれたお尻の穴を今から犯されるのね……」

そして、その嘆くような呟きの中で、彼女は自分の言葉に酔い、激しく欲情し、更に性器を濡らす。

平尾が亀頭の先端を肛門の表面に押し付け、柔らかな粘膜の弾力を味わう間も、彼女は欲情に狂ったかのように、言葉を発しつづける。

「犯して、わたしのお尻、引き裂かれても良いわ。あなたの思うままにわたしを苛めて、淫らなわたしを罰して、淫らなわたしのお尻を痛めつけて！」

平尾がその叫ぶような言葉を聞きながら、ゆっくりと腰を進めはじめ。

いたぶられた肛門を犯される感触に、麻美が快樂と苦痛の入交じった叫びを上げる。

「ああ！ ああ！ イイツ、凄くイイの。ああ！ 痛い、痛いのも、ああ、痛いっ……、でも感じる、凄く感じるっ……！」

陰茎を彼女の中に収め切った平尾が、強く腰を尻房に叩きつけると、彼女の喉の奥からは内臓を押し上げられるようなうめきが漏れた。

麻美が繰り返し続ける欲情の声を聞き、昂ぶった平尾が、その興奮のままに彼女の髪の毛を後ろからつかみ、強く手前に引き上げる。

無理矢理に顔を上げられた彼女が、狭められた気管で激しく息を吐くと、平尾は更に強く髪の毛を引きながら腰を激しく振りはじめ、下腹部で柔らかく歪む尻房の弾力を楽しむ。

「ああ！ ああ！」

麻美が掠れた声を上げ、その苦しさの中で激しくよがる。無意識に肛門が窄められ、そこを犯す陰茎を食い千切るかのように締め付ける。

「うう！」

思わず快樂の低い声を漏らした平尾が、先ほど以上に麻美の尻房に向けて平手を叩き付ける。「動かせ、前後に尻を振れ、尻穴でオレを楽しませろ！」

麻美の腰が、肛門に突きいれられてくる陰茎の動きに合せるように、前後に動きはじめると、彼女のすぐ前の床に膝を付いた美佐子が、快樂と苦痛との表情に歪む彼女の顔に両手をかけ、喘ぎによる涎で濡れる半開きとなった唇に、自分の唇を合せる。

舌が深く挿し込まれてきた。

互いの唇を貪り合う二人の女。それを見下ろす平尾が腰を強く引き、肛門から陰茎を抜き出す。

「あつ！ イヤツ、抜いちやダメツ……！」

「このイヤらしい牝がっ！ そんなに尻を犯されるのがイイいのか？」

「は、はい……、イイの、とってもイイの」

平尾が冷たく微笑し、そして床に仰向けになる。

「じゃ、自分で入れて見せろ」

麻美が、床に寝そべった平尾の股間で、固くそそり立つ陰茎を見詰め、そして一瞬の躊躇の後、彼の腰を跨ぐ。

美佐子がベッドの上に転がっていたバイブレーターを取り、彼女に見せ付ける。

「脚も開きなさいよ、これで前も翳ってあげるわ。嬉しいかい？」

「はい、嬉しい、嬉しいです」

答えた麻美が、美佐子に向けて股を大きく開いて性器を晒し、片方の手で尻の真下で勃起する陰茎をつかむ。

平尾が、自分の下腹部のすぐ上で2つの曲線を描く尻房に手をかけ、無理矢理に左右に押し開

く。尻肉の狭間で性器と肛門が捲れ上がり、その内部の紅鮭色を覗かせる。

麻美が、握った陰茎を肛門に触れさせてから、腰をゆっくりと落しはじめ。

平尾の視線のなかで、麻美が上下に尻を振る。

開き切った尻房の狭間では、肛門とその向こうの性器とが赤く充血した粘膜を晒け出し、その中心に濡れた亀頭が半ば食い込んでいる。

麻美が、自ら進んで陰茎を受け入れる時の挿入感に耐えかねて頭を振りはじめると、ショートカットの髪が、細く白い肩に揺れ、彼女の膣穴からは、愛液が細い糸をしたたらせる。

ひとときわ激しく麻美が喘ぎの声を上げたとき、張り詰めた亀頭が肛門に埋った。そんな猟奇的な光景に昂ぶった平尾が彼女の腰を鷲づかみにして、自分の下腹部に向けて引き下ろす。

「うぐっ！」

平尾の下腹部に麻美の尻が乗り、柔らかくひしゃげたその瞬間、麻美が内臓を突上げられる苦痛に悲鳴を上げた。

平尾が命じる。

「腰を振れ、尻の穴を窄めるんだ。尻でオレを楽しませろ！」

平尾の命令に、麻美がすすり泣きの声を上げながら腰を上下に振りはじめ。

彼女のの前では、美佐子がバイブレーターのスイッチを入れ、その淫らに首をくねらせる陰具で彼女の性器を騷りはじめる。

既に濡れそぼっている膣穴は、すぐにバイブレーターの表面を愛液のぬめりで満たした。

尖った陰核を集中して責められると、その快楽に麻美がすすり泣きはじめる。

「欲しいかい？」

美佐子が意地悪く問いかける。

「は、はい……。欲しい、欲しいの……」

麻美が、前後の肉穴を騷られる快感と、それを助長する苦痛に途切れがちになった声で答える。

美佐子が微笑し、じわりと押し開くように陰具を埋める。

「あああ……！」

くねるゴムの亀頭が濡れた肉壁をこね回し、麻美が大きく身体をよじり、身悶えする。

しかし、彼女に与えられた快楽は一瞬であった。

美佐子がバイブレーターを抜くと、麻美の腰がその後を追うように突き出された。

「あっ！ お願い、わたしの中に下さい、わたしの中に入れて、かき回して！」

懇願する彼女の乳房を、美佐子が平手で打ちすえる。

「イヤらしい娘だねお前は！ お尻を犯されてもまだ満足できないのかい？ お前みたいな女は人間じゃないよっ！ 人間以下の奴隷だよっ！」

その言葉は麻美の心に突き刺さり、そして今感じている強い欲情を更に助長する。彼女の心の内で、あのホテルでの日に芽生え、そして確実に成長していたマゾヒステックな意識が、美佐子の言葉によって確信となる。

麻美が叫ぶ。

「ええ、良いです、奴隷になります。あなた方二人の奴隷になります！　どんな事でもします、どんなに苛められてもいいっ、だから、だからっ！」

麻美は憑かれた者のように叫びつづけ、そしてそんな、自虐の言葉を発する度に、自分の中でますます快感が昂ぶっていく事を知る。

「そうだよ、お前は私達の肉人形になるのよ、私達が好きなときに好きなようにいたぶれる奴隷にねっ！」

美佐子が宣言し、バイブレーターを愛液を吐き続ける麻美の膣にねじ込み、強く、まるで引き裂くかのように激しく動かしはじめ。

麻美が、その快感に全身を震わせ、叫ぶ。

「もつと、もつと、もつと苛めて、淫らなわたしをめちゃくちゃにしてっ！」

平尾が、激しく上下しだした麻美の尻の動きに合わせて、腰を突き上げはじめる。

性器と肛門を同時に責められる麻美が、気が狂ったかのようによがり、泣き叫び続ける。

麻美の迎えた絶頂は、狂気の一步手前であるかのように激しいものであった。

平尾はその瞬間、苦痛を感じるほどに強く陰茎を締め上げられ、美佐子は、手の中のバイブレーターが、それを啜え込む膣穴の収縮によって蛇のようにのたくり、震えるのを感じ取った。

絶頂を食った彼女がぐったりと尻を下腹部に乗せると、平尾がまだ余韻に細かく痙攣を繰り返している彼女の腰に手をかけ、射精を終えていない陰茎を抜き去る。その表面には、彼女の腸管の中の粘液と、彼が漏らした粘液がこびりついている。

陰茎を抜かれた肛門が、まるで独立した一匹の動物のように窄まり、その内部の充血した粘膜を隠すと、平尾が彼女の身体を押しつけ、立ち上がる。

床にベッタリと座り込んだ彼女が、まだ焦点がはっきりとしない瞳で平尾を見上げ、その股間で固く起立している陰茎を見詰める。

「欲しい……」

麻美が痴呆のように呟き、半開きとなった唇の端から一筋の涎を垂らす。

平尾の手が頭にかかった時、麻美は自ら進んで陰茎に顔を寄せ、口に啜えた。

「吸え！」

平尾が短く命じると彼女は、陰茎を口に啜えたままで平尾を見上げ、小さく肯いた後、陰茎に舌を這わし、吸い上げはじめる。

彼女は、口のなかの陰茎の熱さと固さ、そしてその弾力を味わい、楽しむ。新たに尿道から滲みはじめた粘液を、まるでいとおしむかのように舌に絡め取り、窄めた唇で竿の部分を圧迫する。

見上げる平尾の表情に快樂と昂ぶりの色が浮ぶと、彼女は込み上げてくる喜びを感じ、いつそう舌使いを激しくする。

「美佐子」

平尾が呼ぶと美佐子が彼の後ろに回り込み、両手で開いた尻の狭間に顔を押し付け、肛門とその下で揺れる垂れ袋を舐めはじめる。

「……うう」

快樂にうめく平尾が、麻美の頭をつかんで前後に揺すりはじめると、彼女はすぐに自分から頭を振りはじめる。

平尾が前後に感じる女達の舌の快感に顔を歪め、息を荒くし、そしてその頂点で射精する。

麻美は、その瞬間の陰茎の痙攣と、口の中に放たれた熱い飛沫を舌で受け止め、その大量の白濁を口に含んだまま亀頭を吸い、内部に残った精液を吸い出す。

腰を引いた平尾に、麻美が問いかけるような視線を向ける。

「ご主人さまの味を十分に味わえ」

平尾が、快感の余韻を残す乱れた息遣いで言うと、麻美が舌をくねらし、口に含んだ精液を舐め回す。

彼女は、半開きとなった唇から白濁と唾液が混ざった粘液が溢れそうになると、こぼすまいとしてすすり上げ、そして平尾の味わいを存分に楽しむ。

平尾が淫らに動くその頬に手をかけて命じる。

「飲め」

麻美はまるで惜しいとでもいうように、ゆつくりと精液を飲み込んでいく。

喉がこくりと動き、ぬめった舌が唇を舐める。

「美味しい……」

麻美が虚ろな目をして囁いた。